令和４年度　少年の塔慰霊祭

期日：令和４年９月 25 日（日）

「少年の塔慰霊祭」は、「上伊那各地より満蒙開拓青少年義勇軍として満州に渡り、再び祖国の地を踏むことのできなかった青少年の御霊を慰霊し、永遠の平和を祈念する」趣旨で、公益社団法人上伊那教育会の平和教育研修事業として毎年行っています。

慰霊祭に先立ち、２回の整備作業にご参加いただいた先生方、ありがとうございました。

慰霊祭は、感染症対策として本年度も一般参加者の募集を取り止め、正副会長等の上伊那教育会役員20 名が参加して執り行いました。

また、慰霊祭の中で、平和研修会として元上伊那教育会長の矢澤静二先生よりお話をいただきました。是非、資料をご覧ください。

追悼の言葉

太平洋戦争終結から、七十七年の歳月が過ぎました。王道楽土の理想に燃え、満蒙開拓青少年義勇軍として中国大陸に渡り、志半ばにして荒野に散った九十余名の若い御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

「満州は日本の生命線」と言われ、昭和七年に満州国が誕生しました。計り知れない資源と広大で未開の原野を開拓して「王道楽土」を築き、国内の人口・経済問題を解決すると同時に、軍事的にも北の守りを固めようとする国策の一環として計画された満蒙開拓。貴殿達 義勇軍もその一翼を担わされたのでした。

国家総動員体制が強化されていく中、上伊那教育会も教師自身率先して大陸に渡り、また上伊那義勇軍父兄会を組織するなど、国策として積極的に取り組み、昭和十二年から終戦までに郡下で約五百名を越える義勇軍を送り出しました。そして、昭和二十年八月九日　対日戦線布告したソ連軍が次々に大陸を南下、「王道楽土・五族協和」の夢は一瞬にして消え去り、関東軍の武装解除は極度の大混乱暗澹たる状況の中、貴殿達多くの義勇軍が若き命を落としていくこととなりました。

教えられるままに何の疑問も持たず純心に生き、そして若き命を異境の地に散らせた九十余名の貴殿達。台上に立つ少年の像は胸を張り、遥か遠くの何を見据えているのでしょうか。今、日本や世界の状況に目をやれば、いのちの尊さや平和に対する危機感を抱かざるを得ない出来事も少なくありません。

しかし、私たちは、今ここに頭を垂れ、過ぎ去りし日々に思いを寄せると同時に、戦後七十七年を過ぎてなお、この上伊那教育会の負の遺産を決して風化させることなく、真摯に学び、永久平和への努力を改めて誓います。二度と、同じ過ちは繰り返しません。

九十余名の若き御霊よ、安らかにお眠りください。

令和四年九月二十五日

公益社団法人上伊那教育会

会長　浦山　哲雄

慰霊祭の様子

追悼の言葉
浦山哲雄　会長

平和研修会
矢澤静二　元会長

参列者全員で
黙祷、焼香をしました

矢澤先生の話を聴く
参列者

公益社団法人上伊那教育会　平和研修会資料

令和4年９月２３日

１　これは満蒙開拓青少年義勇軍の慰霊碑であり、永遠の平和を祈願する「少年の塔」である。

２　満蒙開拓青少年義勇軍とは？

①　昭和６年満州事変⇒満州国建国（昭和7年）・・・満州移民開始⇒日中戦争（昭和12年）

②　昭和 13 年～20 年敗戦…「満蒙開拓青少年義勇軍」として満州へ送り出された青少年

かぞえ16（満 15）歳～19（満 18）歳（徴兵前の青少年）＜現在の、中学3年～高校3年＞

③　国が満蒙開拓青少年義勇軍募集定員を決め、都道府県に人数を割当・指示

⇒　長野県は各市町村に割当・指示　⇒　各市町村は各学校に送り出しを依頼（指示）

③　各市町村で割当充足努力しても定員に達せず。そこで、信濃教育会　⇒　各郡市教育会が義勇軍の送出に協力させられるようになる。昭和 14 年度から。

⑤　昭和14年度から義勇軍希望者の拓植訓練開始。上伊那では、上農寮で3泊4日実施

⇒銓衡（せんこう）　⇒　茨城県内原訓練所で、訓練2～3ヶ月

⑥　満州へ渡る　現地において集団訓練3年間（大訓練所1年、小訓練所2年）

⑦　義勇隊開拓団となって独立。10町歩～20町歩の地主となり、永住する（筈であった）。

⑧　昭和20年8月9日ソ連参戦　⇒　満州へソ連軍が侵攻　⇒　**開拓団、義勇軍の死の逃避行**

⑨　開拓団・義勇軍合わせて犠牲者と帰還者半々。帰還者は、昭和21年春以後故郷へ。

⑩　帰郷後も厳しい生活を余儀なくされる　⇒　新たに郡内、他府県の開拓地へ赴く者多数

３　満蒙開拓青少年義勇軍送出について、上伊那の事情

（1）**伊藤泰輔**；上伊那教育会長の時代（昭和10年度～昭和15年度）

①　**「二・四事件（教員赤化事件）」**…昭和８年、治安維持法違反で上伊那からも多数の検挙者

②　義勇軍送出人数　昭和15年度、上伊那への割当180人、送出人数22人（達成率 12%）

◆「戦争一本やりの時代に、父（伊藤泰輔）は、**周囲の者から、**教育会長としてもっと義勇軍に出せと強く要求されたが消極的で、教育会からも校長会からも孤立的になってしまった。周りから疎まれて会長を辞めさせられた」（伊藤泰輔長男の言葉）

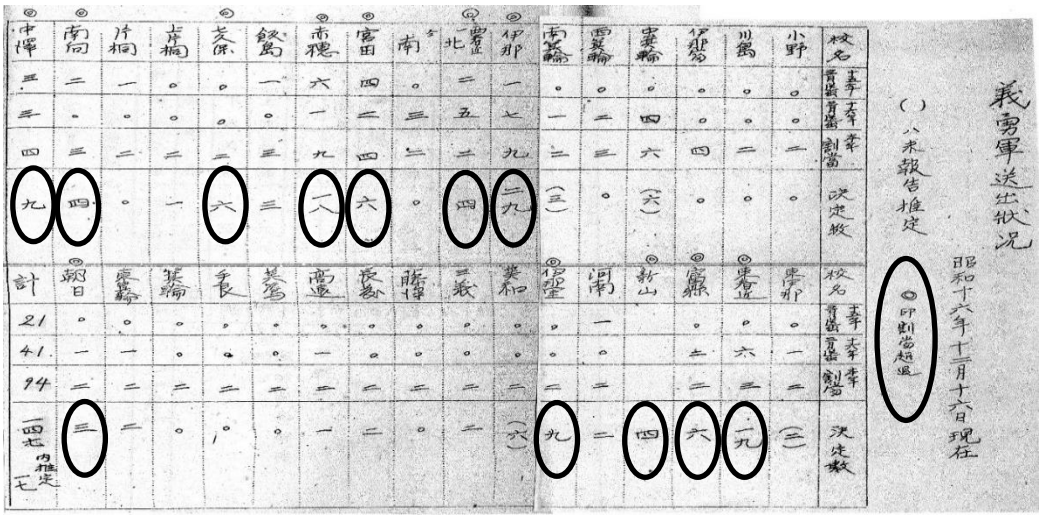
②**「上伊那教育会事件」**…上伊那教育会伊藤会長と、松澤副会長グループとの対立激化

混乱の責任をとらされて、喧嘩両成敗―両者更迭される。

（2） **仁科岡雄**；上伊那教育会長の時代(昭和16年度～昭和20年度)

① 全郡挙げて、二・四事件（教員赤化事件）と上伊那教育会事件の**汚名挽回に邁進。**
戦時体制への協力。以後、満蒙開拓青少年義勇軍の送出人数が飛躍的に増加。

◆ 昭和17年度、割当81人、送出人数132人（達成率 163%）



4 満蒙開拓青少年義勇軍送出人数と犠牲者数

(1) 満蒙開拓青少年義勇軍送出人数 全国 86,530 人。長野県 6,595 人、上伊那 597 人

(2) 満蒙開拓青少年義勇軍として送出された青少年のうち、**犠牲者数91名**。「少年の塔」に氏名が刻まれている。 ⇒ 上伊那教育会教職員の贖罪意識

(3) 満蒙開拓青少年義勇軍生還者への救済措置として、上伊那教育会では3名を雇用。
北原和夫氏（上伊那教育会）、梅垣英人氏（教職員組合）、小松恭二氏（信教印刷）

5 「少年の塔」建立

（1） 上伊那教育会、市町村会、満蒙開拓青少年義勇軍遺族会の三者協働

（2） 多額の浄財（90 万円）を集める。建設費 60 万円、30 万円遺族会へ

（3） **「平和を象徴する青少年の立像」**瀬戸団治氏作―【少年の塔】と命名

★単なる慰霊碑ではない。「少年の塔」は、**『91人の霊を慰め、永遠の平和を祈念する』**

6 以後、毎年、慰霊祭開催（4月⇒10月⇒8月・・・現在）

★ 教育会が慰霊祭・平和研修会を実施しているのは上伊那だけである。

補） ここに義勇軍の碑が3基も建立されていることから、義勇軍慰霊の聖地とも目されている。

① 「満蒙開拓青少年義勇軍招魂碑」＝昭和14年渡満、 曙隊（三江会）、岐阜県と長野県の二県混成隊の慰霊碑。昭和40年建立

② 「我等の魂を永遠に此処に刻む碑」＝昭和16年渡満 横川中隊（西海浪竜川義勇隊）、長野県南信3郡と南北安曇出身者の隊。昭和46年諏訪市に建立。平成5年、当地に移転設置。

7 義勇軍体験者・義勇軍を送出した教員の証言

公益社団法人上伊那教育会　平和研修会（少年の塔慰霊祭）資料　　令和4年9月23日

《子どもを満蒙開拓青少年義勇軍に送った教師　の　言葉》

① 「私宅を訪れた一人の客、それは諏訪方面から来た犠牲者のお父さんでありました。私宅の私の玄関へ入るやいなや、『うちの小僧のような病気一つしたことのない丈夫のやつを何で殺してしまったのだ』と、その時のお父さんの表情と、そして顔と姿がありありと未だに頭から離れません」（元青少年義勇軍小池中隊幹部　梅垣英人）

② 「何故あの14歳15歳16歳の子ども達が満州に渡ったのかということは、私たちが真剣に考える問題だろうと思います。14や15の子ども達が、「俺は満州に行くんだ」と言って、親の言うことも聞きません。先生がほとんど勧めたわけですが、親はほとんど反対でしたね。それを押し切って、印鑑を盗み出しても志願をしていったのはいったい何だったかということ、これを私はしょっちゅう考えさせられたんです」（元青少年義勇軍横川中隊隊長　宮下慶正）

③ 「私は当時青年学校という所に席がありました。青年学校は軍隊の予備校というか、ほとんどが戦争の練習をする所でした。冬、一人の教え子が訪ねてきました。教え子と言っても担任は別で、そのうちに思い詰めたように口を開きました。今、満蒙開拓青少年義勇軍に行けと毎日担任から言われていること、親は賛成していないこと、自分の父は身体が不自由であり、母も病気がち、兄たちは工場へ行っており、百姓は自分がいないと大変であり、妹たちはまだ小さい、というような実情を話してくれました。その子は義勇軍に応募できない自分の立場を精一杯私に打ち明けようとしたのです。しかし私は一通り話を聞き終わると、胸をそらせながら「満州は日本の生命線である。大和民族の発展を考えたら、君等のような若者がこの重責を負わなくてどうする」私は得意になってしゃべっていました。その子はすごすごと帰って行きました。次の日、その子は義勇軍行きの承諾を学級担任に伝えています。担任の先生は私に、「とうとうやったよ。これで目標達成だ。校長先生もご機嫌だよ」と話してくれました。・・・・その子は戦争が終わってもとうとう帰ってはきませんでした。墓石だけが建てられました。」（元青年学校教員　三澤豊）

④ 「私は軍隊に召集されてやはり満州に渡るわけです。昭和 21 年に内地へ帰ってきました。「俺も苦労したんだ」といって慰めてもらうようなつもりで、その懐かしい学校に出かけていったんです。そしたら、その時の高等科の生徒が 5～6 人いました。私は再会が嬉しくてニコニコしながら近付いて行ったんです。そしたら、子ども達は「ごくろうさん」とも何とも言わないで、真っ先に「三澤先生は俺たちと同じように戦争に行ったから許す。だけど、何だ、戦争に行けとあれほど言って無理やり俺たちを行かせておいて、帰ってきてみたら、あの戦争は間違いだと言ってやがる。死んだ者はどうするんだ」と言うんですよ。私はそれを聞いた時に、ハッと思って、「あ、俺は教師だったんだなあ。」ってことをつくづく思いました。教師ってのは、「国の政策がこうで、俺は国の政策の代弁をしただけだ」とか、そういうことでは責任は逃れられないんだなあということを感じました。このことがそれからの私の一生を貫いていく基になっている気がするんです。その子どもたちや亡くなった子ども達に、「ごめんなさい。また間違ってしまった。」なんてことは二度と言えないなという気持ちです。」（元青年学校教員　三澤豊）

⑤ 「当時は国風として、教育会を挙げて全部興亜教育で、会長、副会長も内原で訓練を受け、真っ先に立ち、校長会といえばその割当の表によって、『お前の所は○人でまだ～～』と面と向かっ

て罵倒された校長もあるくらいで、全郡部から挙げて送出というわけで、そのため直接送出の任に当たる高等科二年の担任の先生が、非常に骨を折り苦労をされたわけです」（元校長　久保田玄介）

⑥「義勇軍に志望した動機、自分の意志で志願した者は２～３人に過ぎない。大多数の者が先生と諸先輩の現地便りによる。父母を説得させるのが一番大変だったようだ。長野県が義勇軍の送出数において全国一位で、常に横綱の地位を保ち得たのは、こうした教師たちの熱意の賜である。私たち斎藤隊が送られた先は、嫩江義勇隊訓練所。入隊して１ヶ月の経たないうちに、ひどい生活環境の中で早くも 12 名が病死した。どう見ても 14～15 歳の子ども達がまともに生きていける場所ではなかった。先輩隊員による集団リンチ、殴り込み、食糧の欠乏など恐ろしい所へ来てしまった」（元義勇軍隊員佐藤仁）

《満蒙開拓青少年義勇軍に送られた子どもの　言葉》

【北原和夫氏】

「昭和18年義勇軍に。最後は希望かも知れませんがやはり当時の教育でしょうね。上伊那の高等科二年が上農寮で1週間基礎訓練。その時の指導者は、東筑摩出身の非常に熱心な加藤先生。赤穂小の教育会長　仁科先生。伊那小の副会長　野村先生。先生方の指導が、多くの青少年の心をかき立て、そして決心させたということを思うわけです」

【伊澤　巖氏】

＜義勇得軍応募の動機＞

・小さな頃からお国のために天皇陛下のために尽くしなさいと教育され続けた。特に、尋常高等小学校の最後の年になると毎日のように、先生から、「満州へ行け」「二男坊、三男坊は満蒙へ渡ってお国のため、天皇陛下のために働くのが一番だ」としつこく勧められた。何の疑いもなくその言葉を信じ込んでいた。

・親父は自分の義勇軍応募に猛反対。

・しかし、「お国のため、天皇陛下のために義勇軍に入ることが義務だ」と心底信じていた自分は、何とか親父を説得しなければと、自分は一人前だということを示すために家の農作業を相当な無理をして手伝った。

・自分のしつこい願いをなかなか聞いてくれない親父は、学校の先生が言っていることを信用していなかったようだ。青少年義勇軍の困難さも承知していたのだと思う。

・14 歳の自分がお国のために義勇軍に入るのが当たり前だと狂信していたのは、学校で受けた教育の影響だ。自分は、心の底から、神国日本のため天皇陛下のために義勇軍に入らなければと信じていた。それがお国のために生きる自分の務めだと信じさせたのは学校教育であり先生だった。

・信濃教育会というのは今もあるが、その頃の信濃教育会が先頭に立って「お国のために満州へ行け、天皇陛下のために満蒙開拓青少年義勇軍に入れ」とあおり立てた。今と違って、学校の先生の権威は絶対的だったから、年端のいかない子どもが信じ込むのは当然だ。

・「教育は恐ろしい。間違ったことを教えてしまえば、子どもは信じ込んでしまうのだから。大人は子どもに本当のことを教えなければいけない。」

＜現在の信念・思い＞

・青少年義勇隊の経験から、『青年は銃をとるな』を信念として持ち続けている。

・帰国してから、自分たちを満州に送り込んだ教師が、出世しているのを見て非常に戸惑った。いくら当時の情勢だから仕方なかったと言われても納得がいかない気持ちはある。

・逃避行で歩いた道、子どもが川に流されている光景は全て覚えている。

・死体がゴロゴロしていた光景も忘れられない。

・「満州へ行けば10町歩の土地を持った大規模農民も夢ではない」と送り出されたが、命からがら満州から持ち帰ったものは、出征前に近所のおばさんからもらったお守り一つだけだった。

・**日本人は、満州で他人の土地を奪った。命も奪った。戦争の悲惨さは口では言いようがない。戦争の残酷さ・悲惨さが余りにも重過ぎて、人に話しても分かってもらえないと思う。だから、戦争で体験したことを滅多に人には話したことがない。**